

〈知的生産の技術〉といわゆる〈アカデミック・スキルズ〉と〈司書資格科目〉と—その交差と乖離について（その二）： カード考（試稿）

水谷長志

1. はじめに—こつこつの人

私が敬愛する仏文学者のS先生は、その著書『『百科全書』と世界図絵』（図1）の冒頭の、「少年が垣間見た巨大世界」と副題した「はじめに」で、「中学生の時、ふとしたはずみで読んだ二編の短編小説」を回想している*1。

二編の短編小説は、菊池寛の『恩讐の彼方に』とコナン・ドイルの『赤髪組合』なのだが、前者は九州大分の耶摩溪の絶壁に二〇余年かけて洞窟を穿った話であり、後者も『大英百科事典』をひたすら筆写するという、毎日の「こつこつ」を重ねた人物の話である。

S先生にとっての学者としての毎日の「こつこつ」は、文献を読み、考え、そして「カード取り」をすることであるのは、『いま・このポリフォニー 輪切りで読む初発の近代』の序論の「1 カードシステム」においても繰り返し書かれてい



図1：『『百科全書』と世界図絵』岩波書店, 2009.

ることで*2、この「こつこつ」の果てに「世界図絵」が突如立ち現れるというのである。

この「世界図絵」については、上に紹介の前著をご覧くださいかかないほどに精妙で、人文学的知の精華ともいべきものであるのだが、身近な例としては、繰り返し繰り返し試しては転んでの連続の末に、「ある日ある時、ふいに」身に付く自転車乗りやスケートの滑りのようなものであると、形容されていた。

その結果の研究と仕事の信条については、次の如くに語られている：

私はこうした集中的反復の仕草が、いつしかおのれの身体に蓄積されて、ひとつの創造的記憶になるプロセスこそが、あらゆる仕事や学問の営みの中核にあるのだと納得するにいたり、それ以後、「コツコツ」と地味にやる作業以外にさしたる価値や意味を認めないという、困った偏見を背負い込む仕儀になってしまったのである*3。

このS先生の「こつこつ」の仕事は、日々の食後の歯磨きのようなものだとも書かれているのだが、それは学びのための読書であり、講義の準備であったり、翻訳であったりするのだが、市九郎の一刻一刻やウィルソンの一筆一筆になぞらえて、もっとも相応しいのが一枚一枚を重ねていく「カード取り」に他ならないのである。

もう一人の「こつこつ」を「カード取り」において実践したのが、『菅家文章』に「書齋記」を遺した菅原道真であろう。

又、
学問之道、抄出為宗、
抄出之用、稟草為本。
余、非正平之才、
未免停滞之筆。
故、此間在在短札者、
惣是抄出之稟草也。

又、
学問の道は、抄出を宗と為し、
抄出の用は、稟草を本と為す。
余、正平が才に非ざれば、
停滞の筆を免れず。
故に、此間に在りとし在る短札は、
惣て是抄出の稟草なり。

菅公、菅原道真の「一丈餘」の書齋において書き溜められていく「短札」、すなわち「カード」は「抄出」という和漢の書からの抜き書きであり、これこそ「学問之道、抄出為宗」であるのに：

有智者、見之卷以懐之、
無智者、取之破以棄之。

智有る者、見て巻き以て懐にし、
智無き者、取りて破り以て棄つ。

など不屈き者が、書齋にあらわれては、菅公のせつかくの学問を邪魔する様が描かれている*4。

人文知においてまごうかたなき一角を支えてきた、そして一度は人文の学徒なら誰もが試みたであろう「知のスキル」としての「カード」システムについて、本誌前号に続けて「研究ノート：〈知的生産の技術〉といわゆる〈アカデミック・スキルズ〉と〈司書資格科目〉と—その交差と乖離について」の観点から、以下に試稿してみたい。

- * 1. 鷺見洋一、同書、p. 3. 岩波書店, 2009.
- * 2. 鷺見洋一、同書、p. 7. ぶねうま舎, 2019.
- * 3. * 1 の p. 7.
- * 4. 林望『書齋の造り方 知のための空間・時間・道具』光文社, 2000 の「書齋の記一序に代えて」p. 3-5 および <http://michiza.net/jcp/jcpcb526.shtml> 以下に現れる URL はいずれも 2022.1.10 に参照

2. 知の「技術」化—はじめりは、梅棹忠夫!?

2.1 『知的生産の技術』に出会ったころ

カードシステムと言えば、その第一の論者として、B6 版の京大カードを世に送り出した『知的生産の技術』（岩波新書〈青版〉F-93・以下、『知的生産』）の著者であり、いまに続く「知的生産」ブームを興した梅棹忠夫（1920-2010）を挙げることは、だれもが同意されることだろう。

ちなみに、梅棹のこの新書と並んで評判をとった『整理学』*1 を著した加藤秀俊は『季刊民族学』の談話において、加藤がはじめてカードシステムに出逢い、「カードの方法を学んだのは」、同じ京都大学人文科学研究所で机を並べた鶴見俊輔であったと書いているし*2、梅棹自身、桑原武夫が先導した人文研での組織的共同研究の嚆矢である「ルソー研究」「フランス百科全書の研究」を通して、川喜田二郎、樋口謹一と共著で「研究におけるカードのつかい方」を未完ながら論文にまとめた、と記録している*3。

『知的生産』は岩波書店の『図書』に1965年4月からの連載が初出である。1969年の7月に第一刷されて岩波新書の一冊となり、2020年には100刷にまで刷りを重ねた。私をはじめで新書なるものを手にしたのも岩波新書で、同じ梅棹の『モゴール族探検記』であった。こちらは『知的生産』に先立って、1956年刊の同じ青版の「F-60」だった。『モゴール族探検記』の読後に『知的生産』を買ったはずで、おそらくは1970年かその後だったろう。おそらくは筆者が中学生の頃だ。

1970年の春に始まる大阪万博が終わって、その年の秋も深まった11月25日、三島由紀夫が自衛隊市ヶ谷駐屯地で割腹自殺を遂げたことは、いまだ『金閣寺』か『潮騒』くらいしか読んでいない身にも、なにやら時代の転変の急なことが肌を感じられたことを思い起こす。とは言ってもまだ世間や世界や政治には疎い中二生の頃では、庄司薫が『赤頭巾ちゃん気をつけて』以下の連作において繰り返し作品中

の主人公やらその友に語らせた、そして庄司薫自身、1973年に世に送り出した『バクの飼主めざして』であらためて「オドカシッコの時代」として一篇を書くような、すなわち：

つまり、いつでもみんなが驚くような知識や話題をくわえこんできてひとをオドカしてまわること*4

に傾斜しているばかりであった。そんな風であった、と記憶している。であるから、と接続しても筆者には違和感は稀薄なのであるが、わが身を『知的生産』にもっとも引き寄せたのは、第1章の「発見の手帳」であり、メレジュコフスキーの『神々の復活』（岩波文庫全4冊、1935）に描かれたレオナルド・ダ・ヴィンチに梅棹と同様、深く魅かれた。

昭和10年に刊行のこの『神々の復活』は長く絶版のままいまに至っている。この4冊の岩波文庫を古書で手に入れたのは、ずうっと後年であったが、梅棹のこの1章によって引き出された感銘は、梅棹と同じく、ダ・ヴィンチが日々「発見の手帳」に書きつけるその姿であった。加えて、おそらく同じほどのタイミングで、1972年、イタリア放送協会制作のドキュメンタリー・ドラマの大傑作「ダ・ヴィンチ ミステリアスな生涯」としてNHKによって全5回270分がはじめて放映されて、熱狂的に見入ったことの記憶にも連なっている。

この記憶にある中高時代の校舎の気分と薫君の「オドカシッコ」の無邪気な一見知的な悪ふざけと『知的生産』との間には、心地よい親和感があった。

あれから半世紀…梅棹の〈知的生産の技術〉も手帳、ノートから始まって、「2ノートからカードへ」と展開していることに、いま、あらためて注意が引かれるのである。

- * 1. 加藤秀俊『整理学 忙しさからの解放』中公新書 13, 1963.
- * 2. 加藤秀俊「一九七〇年前後の梅棹忠夫」『季刊民族学』nos. 172, p. 6. 聞き手：中牧弘允、同誌の本号は、「梅棹忠夫生誕100年記念 特集：梅棹忠夫が見ていた未来」
- * 3. 『知的生産』p. 46. 「『自然と文化』資料編第二号として出版するつもりで、予告まででした」とある。
- * 4. 庄司薫、同書、p. 89-93. 講談社、1973. 初出：『青春と読書』1971年 SPRING.

2.2 梅棹忠夫の言葉から

『知的生産』においては、次章「3 カードとそのつかいかた」へとカード論は進むのであるが、2011年開催の「ウメサオタダオ展」の実行委員長でもあった国立民族学博物館教授小長谷有紀氏の編による『梅棹忠夫のことば』において紹介されているものも含んで、極みの言葉のいくつかを次に引いておきたい*1：

小長谷氏の選択から (k-1)：読書カードをつくる時にかくべき内容は、読書によって誘発された自分のひらめきや着想であって、本の抜粋ではない*2。

小長谷氏の選択から (k-2)：自分というものは、時間がたてば他人とおなじだ、ということをおぼえてはならない*3。

小長谷氏の選択から (k-3)：ものごとは、記憶せずに記録する*4。

筆者の選択から (m-1)：一見なんの関係もないようにみえるカードとカードとのあいだに、おもいもかけぬ関連が存在することに気がつくのである*5。

筆者の選択から (m-2)：カード法は、歴史を現在化する技術であり、時間を物質化する方法である*6。

筆者の選択から (m-3)：だいじなことは、カードをかく習慣を身につけることである。どうしたら、その習慣がみにつかか。根気よくつとめるほかないのだ*7

* 1. 小長谷有紀編、同書、河出書房新社、2011.

* 2. * 1. の p. 16. 初出：『『知的生産の技術』その後』『私の知的生産の技術』岩波書店新書別冊 3, 1988, p. 4.

* 3. * 1. の p. 30. 『知的生産』 p. 55.

* 4. * 1. の p. 32. 『知的生産』 p. 170.

* 5. 『知的生産』 p. 58.

* 6. 『知的生産』 p. 60.

* 7. 『知的生産』 p. 64.

2.3 カードから執筆へー「ござね」という発想から文章への飛躍の道具^{ツール}

『知的生産』の章立てにあらわれる内製のメディアは、手帳・ノート・カード・スクラップ（切り抜き）・手紙・日記というところだが、それらはいずれも来るべき原稿であり、知的生産の成果物たる文章・著作のための仕込みであると言ってよい。『知的生産』において章の一つには立てられていないが、実はカードと並んで梅棹の極め手と言えるのが、実は最終11章の「文章」に控えめに挿入された「ござね（法）」ではないだろうか（図2）。

友人でもあった川喜田二郎の『発想法』*1において描かれた「KJ法」の手前、似ている「ござね」の法をあまり公言するのも躊躇われたのかもしれないが：

（ござね）法のいいところは、創造的思考をうながすことで…中略…ばらばらな素材をながめて、いろいろとくみあわせているうちに、おもいもよらぬあたらしい関係が発見されるものである*2。

カードからござねへのジャンプがどうしても文章、著作の成立には必要であった。そのジャンプのためにこそ、記憶ではなく記録のためのカードが、ござねのシャッフルのために準備されたとは言えないだろうか。

そして、「おもいもよらぬあたらしい関係が発見される」ことにこそ創造として

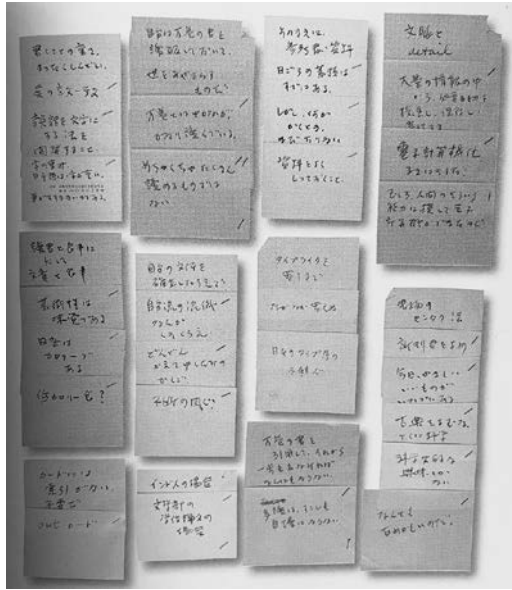


図2：こざね 国立民族学博物館『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』展図録，2011, p. 100. より

の文筆の醍醐味があることも。

- * 1. 川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』中公新書 136, 1967.
- * 2. 『知的生産』p. 205.

3. 図書カード

3.1 なぜにアレクサンドリアの図書館であるのか？ 映画『Agora』から

図書館の始まりをどこまで遡るか、どこに求めるかの議論は難しい。「古代の図書館をとりあげる場合、まず考えておかねばならないのは、文書館と図書館の区別である」と書いたのは、わが国で図書館史の第一人者として多作であった藤野幸雄先生の言である*¹。

1950年代に発掘された、紀元前7世紀にまで遡るという古代アッシリア王国のアッシュールバニパル王は楔形文字を刻みつけた多数の粘土板を集積した文書館を遺したが、これを図書館ということは稀である。

図書館として古代世界に名を輝かすのは、やはり学問所（ムセイオン、ミューズの集うところ）が形成された古代オリент世界のアカデミック・センターにおいて構築されたアレクサンドリアの図書館が嚆矢となるのであり、それは「利用のための図書館」たり得たことを保証する「目録」の存在にあることは、筆者が本誌の

先の17号（2019）に書いたところである*2。

このカリマコスによる『ピナケス』が、「文献目録（≒書誌：bibliography）」であるのか、「蔵書目録：catalog」であるのかは、微妙に議論の分かれるところであるという*3。

そもそも謂ゆる「失われた図書館」としてのアレクサンドリアの図書館の崩壊の議論そのものが様々に複合的である。であるが、最終的な崩壊を招いたのがローマ皇帝テオドシウス1世（Theodosius I, 在位 379-395）、すなわち迫害され続けたキリスト教をローマ帝国の国教とした御代のことであったことを示唆するのが、2011年に日本でも公開された映画『Ágora（邦題：アレクサンドリア）』である。

ストーリーは女性天文学者ヒュパティアの地動説を主軸としながら、結局のところ多神教（古代オリエント～ローマの神々）VS 一神教（キリスト教）の対立を描くのであるが、そのもっとも尖鋭な描写は、異教であり邪教の巢窟たるアレクサンドリアの図書館の崩落のシーンである。ここに描かれる図書館の姿は、蔵書のパピルスの巻物（Volumen）であり、天井画の〈記憶の女神〉ムネモシユネの娘である学芸の女神たちミューズ（ムーサ）たちである。

そこに働く司書奴隷のダオスが、図3の通り、何かが書きつけられているのだろう小板を左手に、そこにはおそらく図の下手、左方に巻物を取めて架蔵する書棚から書物を探し出すための蔵書のデータが記されている、そして3冊（巻）のパピルスの巻物書物を右手にして現れるのである。



図3：『アレクサンドリア』（原題：Ágora）2009年公開 より

わたしたちはここにあのポンペイの古代遺跡から出土されたもっともよく知られて美しい図4を容易に思い出せるのではないだろうか。その端正な面立ちから、古代ギリシャの女性詩人サッフォー（Σαπφώ / Sapphō, 紀元前7世紀末～紀元前6世紀初）とも呼ばれるこの女性の左手にあるのは、蠟引きされた複数葉の小板を綴じたものであり、そこに尖筆で書きつける模様は、あたかも今日のモバイルツール（iPadのようなタブレット）ではあるまいか。



図4：蠟板と尖筆を持つポンペイの女

c. AD 55-79, 37x38 cm ナポリ国立考古学博物館蔵

デイビッド・トリッグ著『書物のある風景 美術で辿る本と人との物語』創元社, 2018, p. 14 より

本作は特別展「ポンペイ」東京国立博物館平成館, 2022.1.14～4.3 に招来される

<https://pompeii2022.jp/highlight/>

ダオスの手にした小板に書きつけられた記述は、蔵書である巻物：Volumen に係る情報であり、そしてその背景には、120 巻にも達したというカリマコスが編じた書誌であり蔵書の目録である『ピナケス』の後身があったろうことを思えば、これもまた図書カードの一形象であると言えるだろう。

- * 1. 藤野幸雄『図書館史・総説』図書館・情報メディア双書・1, 日外アソシエーツ, 1999, p. 12-13.
- * 2. 水谷「知識と情報を編む一書誌をめぐる二、三の断想」p. 30.
- * 3. * 1 の p. 27.

3.2 メルヴィル・デューイと間宮不二雄の図書カード

図書館の蔵書の目録は長きにわたりそれ自体が、古代アレクサンドリアにあっては巻物状の、中世においては厚く、硬く、重く、嚴重莊重に装丁された、堅牢で重厚な冊子体（コデックス：Codex）であった。綴じられた冊子の目録では自由に加除はできない。そして標準化規格化されていない。目録規則も発展途上であった時に、その状況を大きく変えたのが、アメリカ独立百周年を祝うフィラデルフィア万博において世界初の図書館協会の発足を導いた、図書館界の革新者メルヴィル・デューイ（Melvil Dewey, 1851-1931）であった。

図5は *The Card Catalog: books, cards, and literary treasures / the Library of Congress* に現れるデューイ創案の、かつデューイ自身が起業した図書館用品カンパニー、ライブラリー・ビューロー（Library Bureau）の「製品」のもっとも重要かつ広汎に用いられて、そして世界標準となった5x3 インチの図書カードである。この新製品の誕生の背景は、まぎれも無く、書籍そのもののフォーマットの成熟と図書館世界における分類法（図書館分類の典型たる十進分類法こそはデューイの創案！）と目録法の標準化にほかならないのである。そして、20 世紀の末には、図書館の現場から紙の図書カードは役割を OPAC（Online Public Access Catalog :

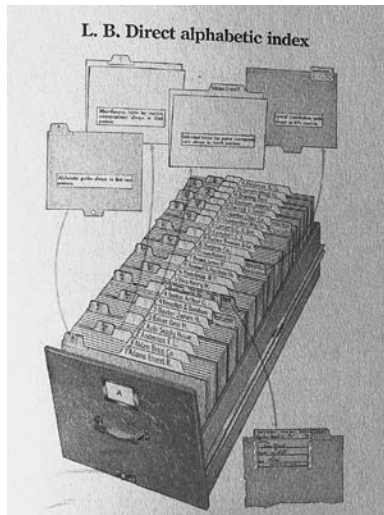


図5：Supply catalog from Library Bureau, 1897-1920. from: *The Card Catalog: books, cards, and literary treasures / the Library of Congress*, 2017, p. 85.

オンライン蔵書目録)とインターネットに譲り、その姿を消した。

デュエイの多岐にわたる功績を日本において引き継いだ人物こそ、石山洋氏がかつて「(図書館の)外野から叱咤激励した」と書いた間宮不二雄であった*1。図書館の実務の世界の三種の神器と言える、「日本十進分類法(NDC:森清、昭和4年-)」「日本件名標目表(NSH:加藤宗厚、昭和5年-)」「日本目録規則(NCR:聯盟目録法制定委員会、昭和17年-)」は、いずれも間宮がお膳立てした青年図書館員聯盟とその機関誌『圖研究』(創刊昭和3年-18年終刊)から生まれ、そのバックアップに与ったのが合資会社間宮商店であり、戦後、間宮本人が再建したジャパン・ライブラリ・ビューローなのであって、その主たる商品もまた、デュエイ創案の5x3インチの図書カードであったことは、やはり明記しておくべき歴史の一項だろう。

* 1. 石山洋「〈源流から辿る近代図書館・34〉外野から叱咤激励した図書館用品店主間宮不二雄」『日本古書通信』no. 890, 2003.9, p. 20. 後に『源流から辿る近代図書館 日本図書館史話』日外アソシエーツ, 2015, 90-92. に再録。

3.3 書誌と目録

さて、今日、図書館の現場から紙の5x3インチの図書カードは姿を消したのであり、司書資格課程の、例えば情報資源組織論などの科目からも手書きで図書カードを書くことは無くなっている。

かつては手書きのカードは、例えば図6の通り、目録法において司書の身に着け

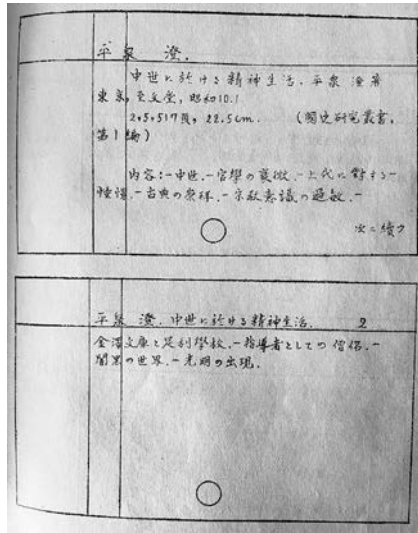


図6：カード記入例 p. 49.

青年図書館員聯盟目録法制定委員會編『日本目録規則 N.C.R. 昭和17年(1942)』編輯兼發行者：間宮不二雄 再版印刷 昭和26年2月 發賣元：京都出版株式會社

るべき必須技能として重要視されていたのである。また、個人文庫でありジャーナリスト大宅壮一の頭脳の体现である雑誌記事索引のカードは、今日ではデータベース化され本学からもオンライン検索が可能になっているが、まだまだ図7のように、徹底した独自の手書きカードの迫力に変わるところはなにもない。

わたしたちは図書館にかつてあったカード・ボックスのカードから検索される図書など資料は、体感的に疑うことなく、この図書館の蔵書であることを自明なこととして理解していた。

さて、前号のこの〈研究ノート〉でも筆者が紹介した、2020年、一部界限で話題となった『独学大全』（ダイヤモンド社）において、「技法の前に 運に頼らない本の選び方」の「書物（より広くは文献）を探し選ぶために最低限必要な基本的ツール」が、次の5種に大別して掲げられている（下記の番号は筆者による）*1。

- [1] 事典：しらべものツールの第一選択
- [2] 書誌：探しものの達人の「肩」に乗るツール
- [3] 教科書：入門＋事典＋書誌を束ねたオールインワン
- [4] 書籍：人が忘れるものを持ち続ける独学の盟友
- [5] 雑誌記事（論文）：知の最前線へ向かう扉

この5大別をあらためて説くことは入学して間もない新入学生にはとても有効であり、かつ重要である。



図7：「雑誌の図書館 大宅壮一文庫」

<https://www.youtube.com/watch?v=BgjMdwQpV28> よりキャプチャ

司書資格課程の受講学生に対しては、この調べ方を必修科目として1-2年生を主たる対象として開講する情報サービス論で特に重ねて、とりわけ、[1]と[2]には時間を割く。とともに必ず問題意識の芽生えた学生の発する質問こそ、「書誌と目録の違い、その差異は何ですか？」ということになる。

現物の冊子体の書誌や現役で稼働する図書カード・ボックスの図書カードが図書館の日常において、現実の差異として立ち現れていた過去においては、この疑問はなかったかもしれないが、今日、全てを端末のディスプレイを通しての垣間見が常態化するにあっては、実のところこの差異を体験として認識させるのは、コロナ禍にあってなおさらのこと、困難であることもまた事実なのである。

昔、小学校の卒業式で卒業生の一人が代表して、後輩へ贈る、例えば校庭に置かれるベンチであったり、植樹の樹々であったりを「目録」として読み上げる風景は、よくあった。この卒業式で読み上げられる目録こそ、贈られるベンチや何ものかの代替物になっている、すなわちサロゲイト (surrogate) であることをもって、目録の本質、すなわち物質との紐づけられが明示される。

図書館の〔蔵書〕目録が、物質としての本についてのメタデータの集積であるところに書誌との差異がある、という説明は、例えば1982年に刊行された、つまりはインターネット以前の『図書館用語辞典』の下記の抜粋からも妥当であるように思われる：

目録は、実物・実体がほかにあつて、その代わりに、実物の品目や主要な項目を記録したもの、あるいはそのリストである (傍点筆者)*2。

一方、書誌は：

個々の文献を明確に識別出来るように、書誌的事項を一定の方式に従って記述し配

列した文献リスト…中略…所蔵目録（蔵書目録）を合わせて、「書誌類」…などと呼ばれることが多い*³。

この差異は、目録においては「実物・実体」の物質的^{ロケーション}所在を示す「請求記号（call number）」が併記されるのに対して、書誌においては、それは、基本無い。

今日、図書カードに代わったのが、図書館にある検索のための端末≒OPAC、すなわちオンライン蔵書目録なのであるが、一層の発展形を目指すディスカバリーサービス、わけても「ウェブスケールディスカバリ」（Web Scale Discovery、以下 WSD）においては、下記のように多層的な検索レイアを兼ね備えて、利用者に提供されるという。以下は CA1772 からの引用：

WSD の検索モードは、以下の区分から構成されている。すなわち、

- (1) 図書館で利用できる全ての学術コンテンツを対象とする「ローカル」、
- (2) 特定の地域に位置する等、何らかの協定で結びつけられた図書館の全ての学術コンテンツを対象とする「リージョナル（コンソーシャル）」、そして
- (3) 図書館での購読・非購読に関わらず、世界中に存在するあらゆる形態の学術コンテンツを対象とする「グローバル」という 3 種類の区分である。

このうち (2) については、協定という前提がある以上、どの WSD においても、検索モードの選択肢として利用しない図書館が多数であるが、(1) と (3) の選択肢は普遍的に利用されている。実のところ、

- (1) は「インスティテューションスケール」であり、
- (3) は「ウェブスケール」に他ならない。(2) は時に「グループスケール」とも称される*⁴。

すなわち、WSD はウェブスケールのみならず、多層的なスケール概念を包摂する検索システムであると言える。

先に「図書館にある検索のための端末≒OPAC」と書いたが、今日の OPAC は、必ずしも「図書館にある」という限定すらもすでに要らない。非来館での利用、すなわち Web-OPAC を前提にしているし、さらに今後の図書館が提供する検索環境が WSD へと向かうならば、いよいよ蔵書概念は稀薄となり、図書館の館の壁の限定は透明化していくとき、それは「書誌」と「目録」との境界概念の喪失を容易に招来することを、図書館の現場の学に係る司書資格の科目においては、深く認識することが一層肝要となるのである。

* 1. 『独学大全』 p. 284-285.

* 2. 図書館問題研究会編『図書館用語辞典』角川書店、1982. p. 621.

* 3. * 2. p. 266.

- * 4. 飯野勝則「CA1772 - 動向レビュー：ウェブスケールディスカバリの衝撃」『カレントアウェアネス』.no. 312, 2012.6, p. 18-22.
<https://current.ndl.go.jp/ca1772>

4. 蓄積から検索へ—「有限への恐怖」と「無意識下の能力の涵養」

梅棹忠夫と言えば「知的生産の技術」、「知的生産の技術」と言えば「京大カード」であるのは、いまも様々な関連書籍が陸続と出版されていることを思えば、このネットの世界においても、あるいは、おいてなお一層、一枚のカードとその蓄積から生まれる、あるいは〔その蓄積からしか生まれなかもしれない〕僥倖への期待がなお有効であり、継続しているのだと感じられる。

しかしながら梅棹自身には連載執筆の当時から、「カードというものにはふしぎに不人気な点がある」ことへの認識があった。例えば、高橋和巳の言葉を引きながら、「「カード式に整理されすぎた精神はかえって不毛になるだろう」とかいておられるのをみて、おもわず、ひとりわらいし」ていた*1。

このカードへの「心理的な抵抗」の由縁を梅棹は、「わたしたちにはいつも、無限の世界とのつながりを心のささえにしているようなところがある」のに、「カードは、その幻想をこわしてしまう」、「なんだ、これだけか」の残念な感じをもたらし、さらにカードがその使い手の初級者に突き付けるのが、「有限への恐怖」だというのだ*2。実には的確な体験に裏打ちされた、ごもつとも指摘である。

1960年代に梅棹の『知的生産』が岩波書店のPR誌『図書』に連載された時からほぼ20年をおいて、今度は講談社のPR誌『本』にもう一人の知の巨人である立花隆が「「知」のソフトウェア」を連載していた。

「技術」から「ソフトウェア」に代わっているが、「類したもろもろの知的プロセスの技術論をそれなりに読んでは影響を受けたのである」と立花が書くように*3、実は、立花は梅棹になみなみならぬ対抗意識をもってこの連載に挑んだと私は推察している。そして梅棹がかつて指摘した「カードの不人気」を克服する手立てと信頼こそ立花の「無意識下の能力の涵養」という一節であると、私は秘かに睨んでいるのだ。

ぜひ連載後の1984年に、講談社現代新書としてまとめられた当該のページにあたっただきたいが、一部抜粋するならば：

もし、お前が記憶していることをすべて述べよと命令されて、その命令に応ずることができたとしても（もちろんそんなことは現実には不可能にきまっているが）…中略…しかし、それにもかかわらず、その記憶が必要なときに、それは忽然と意識の中によみがえってくるのである*4。

〈知的生産〉の「技術」であれ「ソフトウェア」であれ、あるいはS先生の「こ

つこつ」であれ、その果てに僥倖のように立ち現れる「世界図絵」もまた、この「忽然と意識の中によみがえってくる」時への期待であることは、通底し、一致している、ということなのである。

そして、検討すべき、この先の課題に係る要諦こそは、「想起」であり、「外界」へよりも、「内界」すなわちわが身の頭の中への「脳内検索」ではないかと思案するのである。

ということで、本「カード考」（試稿）をメようとするとき、次稿の課題と題目は、この「想起と検索」（仮題）ということになるであろうことを予告して本稿を終えたい。

* 1. 『知的生産』 p. 61.

* 2. 『知的生産』 p. 60-62.

* 3. 立花隆 『「知」のソフトウェア』 講談社現代新書 722, 1984, p. 150.

* 4. * 3. p. 154.

おわりに―「ある“整理マニア”の悲喜劇」

立花隆は梅棹流の技術を重々意識しつつなお、警戒していた。

それは、「資料整理というものが、一種の底なしの泥沼でいつでも足が抜けるように常に気をつけていないと、どんどん深みに引きずり込まれ、全身泥の中に没してしまうおそれがある*1」ことに釘をさして、さらに立花の眼から見ても資料の整理に完ぺきなクロスレファレンスを備えながら、なおかつ何を生みだせばよいかの目的を見失って、大阪から上京して、立花を訪ねた青年の姿を描いていたことから、明白である*2。

このこと自体、立花が先例として触れていたように*3、フロバールの未完の遺作『ブヴァールとペキュシェ』（*Bouvard et Pécuchet*, 1881）以来の、実は19世紀以降の近代の病でもあるのだが、その超克と「記憶が必要なときに、それは忽然と意識の中によみがえってくる」こととは、実は切実につながっていることは、やはり銘すべき一事であるのに違いない。

* 1. 立花隆 『「知」のソフトウェア』 p. 56.

* 2. * 1. p. 56-58.

* 3. * 1. p. 58.